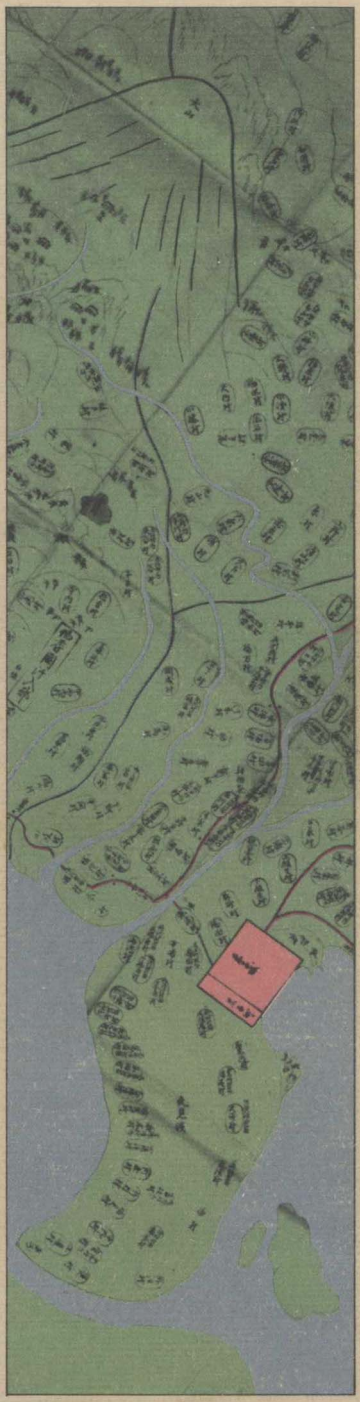
街道をゆく

二十七



司馬遼太郎

街道をゆく

二十七

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和六十一年六月三十日　第一刷発行

街道をゆく　二十七

定価　一三〇〇円

著者　司馬遼太郎

発行者　川口信行

印刷所　凸版印刷株式会社

発行所　朝日新聞社

〒104　東京都中央区築地五―三―二
電話　〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎　一九八六年

ISBN4-02-255547-5
Printed in Japan

街道をゆく　二十七

本書には「週刊朝日」昭和六十年七月二十六日号・連載第六百九十回から、六十一年二月二十八日号・第七百十五回分までを収録。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

因幡・伯耆のみち
安住先生の穴　7
源流の村　21
家持の歌　35
鳥取のこころ　51

因幡采女のうた　67
劇的な農業　81
人と物と自然　95
白兎の浜　111
亀井茲矩のこと　125
茲矩と鷗外　139
夏　泊　153
しづやしづ　167
伯耆国倉吉　181
『木綿口伝』　197

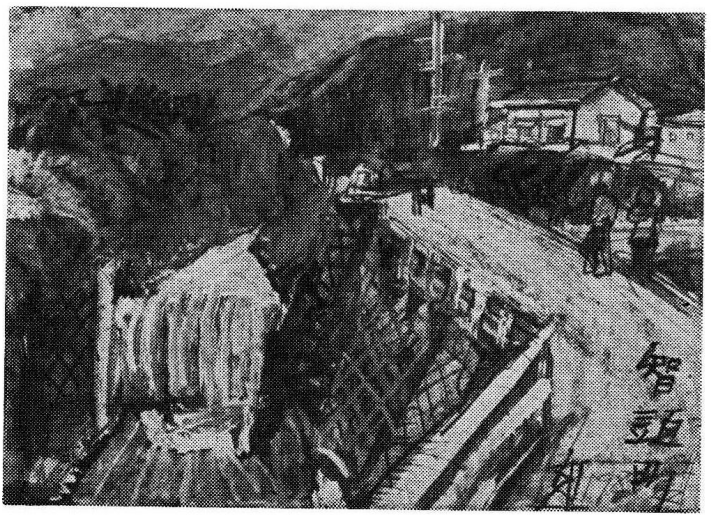
伯耆の鰯売り　211
海越しの大山　225
橋原街道（脱藩のみち）
遺産としての水田構造　239
自由のための脱藩　253
土佐人の心　267
佐川夜話　281
世間への黙劇　295
善之丞時化　309
坂龍飛騰　323

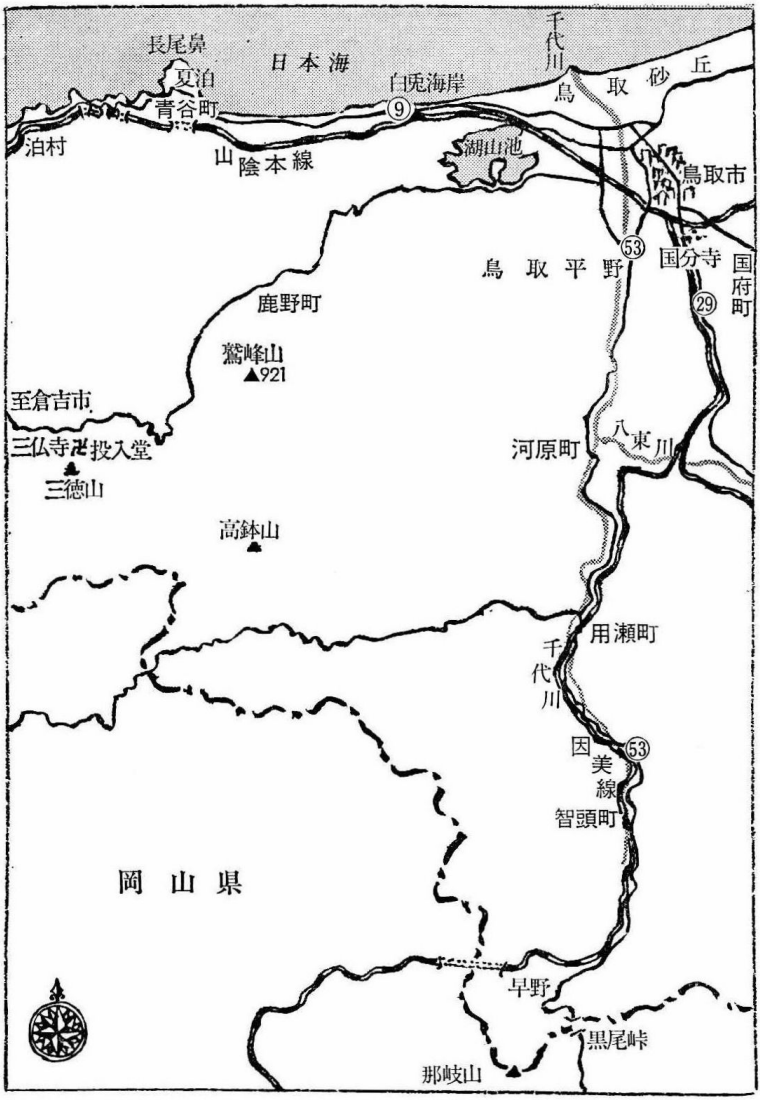
武陵桃源　339
津野山神楽　355
赤牛と黒牛の高原　371

題字＝棟方志功
え　＝須田剋太
装幀＝原　弘
地図＝熊谷博人

安住先生の穴

因幡・伯耆のみち　一





此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

西アジアでは、向日葵は食用である。
お盆ほどもある種の部分を、こどもたちが丸抱えしてかじっている。
「天も、それをかじっている」
という古い民話がある。天が食べる向日葵は、地球ほども大きいにちがいない。齧るたびにぽろぽろとこぼれて、人に当たる。人はその重さに悲鳴をあげてしまう。
その重さが、天賦の自由なのか、天賦の義務なのか、民話はこたえていない。

安住先生は、わが近所の開業医である。
清貧のひとでもある。学問が深い上に天成の臨床家で、人間についての洞察力をゆたかにもっている。うまれついての愛がある。どんな患者にも声を涸らして説明し、身ぶりまで入れる。
そのくせが、ついふつうの会話にも出てしまう。たとえば、
「電車に乗って――」
と、先生が言うとき、座席に腰かけているように中腰になり、両腕をしきりにうしろに振る。景色が背後に飛び去ってゆくさまである。患者の何割かは、言語表現だけでは意味を解しないひとが多いために、つい身ぶりと表情を入れねばならない。相手を思って懸命になれば、ついそうなってしまう。

足りなければ、黒板に図を描く。私の家内が患者としてうかがっていたとき、先生は他の患者のために黒板にくるりとオシリの絵を描いた。べつに絵ごころがあるわけでもないのに、絶妙のうまさだったそうである。

この絶妙さは、画家の絵の絶妙さではなく、本質把握の的確さをあらわしている。さらには患者の理解をなんとしてもたすけたいという懸命な親切心から出た絶妙さなのである。

先生は旧制の学制のころの人だから、齢はわかくはない。それに、さまざまな患者と格闘しているために、顔つきまで使い古びてしまっている。医者も、大学や病院の勤務医になると、権威に保護されているせいもあって、知識人としての風貌を保ちうるが、私どもが住む場末の街の開業医である安住先生は、そういうなりふりが、身につきようもないのである。

先生の医院は、患者がすくないとはいえない。

しかし先生の収入は、世間の分野の水準からいって甚だ高からざるように見うける。

その理由は、私ども素人でも察することができる。医師は先生一人であるのに、看護婦さんが常時五人勤務していて、早番と晩番にわかれている。患者数のわりあいにしては、多すぎるように思える。

しかし、患者にとっては、看護婦という病者の友が多いほどありがたい。また、医師にとっても、助手である看護婦の手が足りているため、むだなことに手をとられずに済む。要する

に、経営感覚から出た数字ではない。

「義務」

から出ている。諸事、先生のくらしのほとんどは、義務から出ている。

義務の義という漢字の意味には「つらい」という感情が入っているのだが、義ばかりでは精神の安定が保ちにくい。

研究医には、よろこびがある。学問のおもしろさというものは何にも代えがたいもののようだが、先生のような開業医にはそれに匹敵するほどの自己戦慄は、ふつうないのではないか。先生にあっては、趣味もない。ただ、写真は撮る。絵ごころのある人だけに、ごく自然に素人ばなれしている。診察室のアルミ・サッシの窓ワクの上の壁に、山村の風景写真がかかげられており、杉木立にかこまれた段丘水田に、雪がふりつもっている。

「峠の村ですわ」

あるとき、先生は答えてくれた。さらにきくと、故郷だという。

鳥取県八頭郡の智頭町というところで、旧でいうと、那岐村の早野という、四十戸ばかりの集落だそうである。全村、山林でくらしているといっていい。

「こんどは、鳥取県にゆこうか」

と、編集部の藤谷宏樹氏と申しあわせたのは、あの清らかな山村風景が、脳裏にあったためである。この一件は、先生には内緒にしておこうとおもった。

地図をひろげて、その村をさがした。

大阪からは、中国自動車道という高速道路が山陽道をつらぬいている。それに乗って、美作（岡山県）の津山に出る。津山で休息したあと、因幡（鳥取県）の国ざかいの山をめざせばいい。

国ざかいの峠は、いくつかある。

地図によると、那岐山という標高一二四〇メートルの山がたかだかと盛りあがっている。その東のほうが鞍部になっていて、黒尾峠という峠がある。それを越えた最初の集落が、早野である。

さらにこまかく地図をみると、早野に細流がながれている。この細流こそ、下流にゆく（北へゆく）につれて沖積平野をひろげ、ついに鳥取市の平野を形成して、河口の賀露で日本海に入る川である。地図では、千代川という。かつては上流は智頭川とよばれ、下流は賀露川とよばれていた。

鳥取県の旧分国は、東半分（鳥取市が中心）は因幡国とよばれ、西半分（米子市が中心）は伯耆国とよばれていた。そのうちの因幡国は、主として千代川一川の流域より成っている。

その源流の地が、黒尾峠の下の安住先生の早野である。

諸事ひかえめな安住夫人からきいた記憶では、彼女は下流の足山のうまれだという。上流と下流の関係は、出雲神話の噺の原構造のような気がする。

「私の家の先祖は、乞食ですなぁ」

と、ある日、先生は真顔でいわれた。

ここ数年前、道路の関係で早野の安住家の蔵をどうこうせねばならなくなり、整理のために人が天井裏に入ると、ひもを通した一文銭が何貫ほども出てきたという。江戸時代の安住家に、老母と娘がいて、四国へお遍路に出かけて行ってもらってきたものだそうである。

安住医院に年配の看護婦さんがいて、いまは津山付近の家に帰って悠々自適しているが、先生は彼女にも、

「うちの先祖は乞食だよ」

といったらしい。彼女は、先生を尊敬し、早野に住む先生の母刀自(ははとじ)も尊敬している。これをきいて、わけもなく感激し、

「先生のご先祖は、おこもさんだそうでございます」

と、拙宅に用があってきたとき、尊敬をこめて私にいった。私は先生のご先祖が流離の公卿であろうが、漂泊のおこもさんであろうが、どちらでもよいが――乞食のほうが、家康の松平家の祖のようにロマンティックでいいが――しかし物事のありようというのは平凡なものなのである。

「江戸時代、因州(因幡)の山奥から、女ふたりがお四国をするというのは、こんにち、アメリカへゆくほどの金がかかったんです。四国で、数カ月も、巡礼に御報謝といって門々に立つのは、真言宗の檀家の修行でした。そこで頂戴したお鳥目は、お大師さんからいただいたものとして、使わずにもってかえって、大切にしまっておいたのです」

と、私は、初老の看護婦さんにいった。

看護婦さんは、品のいい表情のまま、お四国とアメリカゆきとお鳥目との三題噺がにわかにのみこみにくかったらしく、しばらくぼんやりしていた。

安住先生が峠の村ですごしたのは、小学校を了えるまでである。

卒業すると、はるかに千代川をくだって、下流の鳥取市内に下宿した。旧制中学に学ぶためだった。そこを了えると、岡山の六高の理乙に入った。そのあと、旧制の阪大医学部に入った。いまもむかしも、僻地の出身者の就学は物入りなのである。津軽の小さな町にうまれた太宰治が、なにかの作品のなかで、大学卒業まで一万何千円か要る、という数字を書いている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com